



## 運営委員が不足しています。力をお貸してください!!

Q どんなことするの？

A ①担当する講座を決めて運営（受付、司会、記録、講師との連絡調整など）します。②運営委員会（おおむね月 1 回）に参加し、講座の様子や改善点、当面の予定などを話し合います。並行して次年度の講座内容を検討、準備します。③その他

Q 活動費は？

A 活動はボランティアでお願いしています。ただし、会議や運営担当講座への出席については交通費が実費支給されます。また、どの講座でも無料で受講できます。年度の途中から運営委員になってくださった方は、以降の受講料を返金します。

Q 会議は難しいけど、簡単な手伝いなら…

A 現在受講中の講座の受付だけを手伝ってくださる方を募集しています。講座開始の 30 分前には来れる方。受講料は無料にはなりません、往復の交通費を実費支給します。特にすぐ技講座、寄席芸鑑賞講座で急募!!

詳しくは各講座で運営委員にお尋ねください。

◆傷害保険に加入の準備を進めています。

講座に参加するために自宅を出てから、受講中、受講後帰宅する（寄り道しないでまっすぐ帰る）までの間に生じた事故について、補償します。このための個人負担は発生しません。7月からの加入を目指しています。

◆名札の着用をお願いします。

受講中は名札の着用をお願いします。紛失された方はお申し出ください。再発行します。



## 5月の各講座の概要と、ひとこと感想から

（感想は一部を抜粋したのもあります。ご了承ください）

◆時事問題講座 5月2日

「中国の最新事情」 講師：山本恒人氏

講師の山本先生は親の仕事の都合で中国で生まれ3歳まで過ごされたそうです。それで中国への思い入れも強く、現中国の一方独裁を批判しつつ、東アジアの平和や核でイニシアチブを取る事を期待されています。

19世紀のはじめまで中国は世界のGDPの約3分の1を占める超経済大国でした。新中国の指導者の夢は超大国に返り咲くことです。近い将来中国はアメリカを追い越しGDP比率世界一になると言われています。すでに物価水準を考慮すると追い越しているそうです。今盛んに台湾有事が叫ばれています。本当に危険な状態なのでしょうか。台湾国内の世論調査では独立派も統一派も1割に満たない少数派です。大多数は現状維持派です。我々もマスコミの報道に振り回されず冷静に対処する大切さを痛感させられました。

まず資料が充実してしっかり聞くことに集中できた。

「台湾有事」についてよくわかった。正しい認識を日本政府はするべきだ。

中国に対する見方、いろんな角度から見えて、興味がさらに広がりました。



3人掛けは、教室の広さといい「きょうくつ」で、気分的に授業をゆっくり受ける気がしないが…【運営委員会より】ご迷惑をおかけしています。早めの予約を心掛け、広い部屋のキャンセルがないかも常にチェックしていますが…ゴメンナサイ。

上方落語と、江戸落語の違いや、お囃子の違いなど、普段聞かれない事を良くわかるように教えて頂きとても楽しかったです。

寄席の太鼓について聞かせてもらったのが、楽しかったです。一気に寄席通になりました。



仕草オチは、知らなかったなあ

桂三扇さんの明るさと、勢いのある話し方で、落語の基本から、高座まで惹き付けられる内容で集中して聞け、たくさん笑いました。



## ◆寄席芸鑑賞講座 5月11日 「落語を学び楽しむ」 講師：桂三扇氏

寄席講座の第2回目は、桂三扇さんの興味深い話をたくさん聞くことができました。

まずは、寄席の歴史について、日本で最初に寄席を作った人、また、寄席の始まりを告げる太鼓、一番太鼓から二番太鼓など、太鼓の音にはそれぞれ意味があることを知りました。

さらに、寄席での出演者の順番、前座、二つ目～5つ目、そしてトリという順番にはそれぞれ役割や意味があり、寄席の流れを理解することができました。また、落語家さんの出囃子、さらに、落語家さんの道具の説明や楽屋で使われる言葉、ネタの決め方など、落語の裏側についても詳しく教えていただきました。落語家さんの努力や才能、そして楽屋の雰囲気に触れることができ、その世界の奥深さに感動しました。

最後に、桂三扇さんが高座に上がり仕草の説明や小噺、古典落語を披露。会場は笑いに包まれました。この寄席芸講座は、落語の歴史や文化に触れる貴重な機会であり、桂三扇さんのお話とパフォーマンスに大いに楽しませていただきました。落語の魅力や奥深さを改めて実感し、ますます興味を深めることができました



本当にいろんな緑があってきれいで、これらの色を見たまま収めたいと思いつつ、絞りか…ISOが…ピントが…と四苦八苦。でも面白いです。

## ◆写真講座 5月16日 「大江山の新緑」 講師：四方智基氏

今年は季節の進み方が早く、「大江山の新緑」といってもかなり緑が濃くなっているのではと心配していましたが、さすが大江山の中、下界とはかなり違います。好天に恵まれ爽やかな新緑に包まれての撮影会となりました。最初に先生より「生き生きとした若葉の撮影方法」を講義してもらい、いざ撮影へ。今回会場としてお世話になったログカフェのマスター伊田さんから、周辺の木々の名前を教えてもらいながら、葉っぱばかり見てあっという間の1時間。小鳥のさえずりにも耳を傾け、気持ちのよい時間を過ごしました。

課題があったので、やみくもにシャッターを押さず落ち着いて撮影ができた感じです。



## ◆歴史講座 5月17日

舞鶴市指定文化財「糸井文庫」の紹介

講師：小室智子氏

岩滝町出身の糸井仙之助氏が私財をつぎ込んで収集した近世～近代にかけての2,200点の大量の資料、これが「糸井文庫」。今回は、この糸井文庫について舞鶴市郷土資料館の小室智子氏に熱く語っていただきました。

糸井仙之助氏は明治7年（1874）生まれで、海外勤務から帰国した大正6年（1917）から私財を投じて収集を始めています。小室氏によれば資料収集にあたってのキーワードはただ一つ「丹後」とのこと。よって、丹後に関するものなら書籍・古文書・浮世絵・俳諧など、ジャンルこだわらず様々な資料が集められているようです。中でも丹後の伝説を題材とした錦絵（浮世絵のうち多色刷りの版画）については、作成された時代を背景に、美しいだけではなく世相を反映した表現が見え隠れしていることを画像を見ながら詳しく教えていただきました。

現在、この貴重な資料は舞鶴市郷土資料館に保管されており、市指定文化財に指定されています。岩滝の人からは「なんで舞鶴に行ったんだ！」という声もあるようです。

なお、資料はネット上で見るできるようになっています。「糸井文庫閲覧システム」で検索すると該当のページがありますので、興味のある方はアクセスしてみてください。



丹後になぜ、この伝説が生まれたのかに興味があります。「糸井文庫」も舞鶴さんが受け入れ大切にしてくださって、ありがたく存じます。舞鶴市郷土資料館へもこれから伺います。

糸井文庫に行ってみたくなりました。

「ものを集める」ことは歴史を調べるうえで大変役立つことを知りました。

糸井文庫って何？と興味深々で受けた講座でした。新しい知識を楽しく勉強させていただきました。



セミやちょうちょ、ホタルは身近にいつでもいるものなので今までは特に何とも思っていなかったが、改めて勉強すると面白いです。

少し聞き取りにくい時があった。マイク？

セミやホタルの生態や特徴などよくわかり興味深かった。

## ◆自然科学講座 5月18日

「北近畿の昆虫～春ゼミの声を聞こう」

講師：山段眞彦氏

5月16日に写真講座がありました。運営委員の集合場所は大江山グリーンロッジで、周辺ではセミと思われる鳴き声が聞こえていました。「あの声はセミなのか？」「今の季節ではそれはないやろ」と、結論は出せずの会話をしていましたが、その答は2日後に出ました。5月18日の本講座での説明で、ハルゼミという種類が4月中旬から6月末まで活動をするということがわかりました。

今回の講座は主にセミについてでした。セミの分類上ではカメムシの仲間（カメムシ目）だということです。セミは世界に2,000種おり、日本では36種1亜種います。これだけの種類があると、春から鳴くセミがいることも納得できました。また、ハルゼミの生息域は限定されていて、しかも多くは松林で誕生しているそうです。もちろん大江山も生息域でした。講義後半には三段池の松林を探索し、松にとりついた抜け殻を多く発見しました。受講生のみなさんが童心に返ったように熱心に探された結果です。また、セミの抜け殻を採集し、環境指標を調査しているそうです。多いほど自然度は高くなるというのはうなずけます。

## ◆すご技講座 5月24日

### 「社寺建築と古民家で伝統工法を知ろう」

講師：伊東宏一氏

福知山市牧の永明寺の本堂で行いました。講師は福知山市で「山づくりから家づくり」までされている(株)いとう会長の伊東宏一氏にお話をいただきました。去年は「すご技講座」で間伐作業のお話をさせていただきました。伝統工法とは日本の昔からある木造住宅の種類で、一般の戸建て住宅は在来工法と言って筋交い、金物や釘を使用しますが、伝統工法は木材を主に手刻みで継手、仕口加工し、釘などをほとんど使用しない工法です。

伊東会長は木材使用に当たっては、「伐り匂」を大事にすることを強調されました。木が成長していない冬場に伐採することです。これがシロアリ対策にも重要であること。また、受講者の木造建築の寿命などの質問にも答えていただきました。

この後、本堂や観音堂の木材使用状況を見学し、次に移動して、古民家「伊東庵」を見学しました。この古民家は築300年超えの江戸時代の農家で、近くから曳き家（丹波地域では「メンヨ」と言って、解体するのではなく、柱などをジャッキアップしてコロで移動）した建物です。ここを伊東会長の説明で見学し、終了しました。

伊東会長の信念に基づいたお話、大変、感銘を受けました。在来工法の家が少なくなってきたのはさみしい限りです。我が家は50年近くになりますが、大切に使おうと思いました。

木の伐り匂の大切さ、間伐の意味、昔の人の知恵など示唆に富んだ話しが良かった。



昔の家と今現在の家の違い。伊東庵の見学、とても古くても新鮮な感じを受けました。



## ◆漢字学講座 5月25日

### 「人」は人と人が支えあう?! 講師：久保裕之氏

漢字はどうやって作られたのか。目に見えるもの、身の周りのものを線にして漢字を作った。その中でも一番身近なもの、自分たちの人の体を使って漢字を作られた。

今日は「人」という文字で作られた漢字を学習した。人が横を向いた形からできた字、前を見た人からの字、多種多様である。一文字ずつ甲骨文字からの成り立ちがおもしろく、先生の説明を聞くごとに古代の人達の発想の豊かさに驚くばかりであった。

それにしても形のないものを文字にするという難しさ、どのようにして作っていったのか古代人に会って聞いてみたいものである。

それにもうひとつ、漢字にはいろいろな書き方があるということ。「令和」の令でも話題になったが、漢字の点画についていろいろな書き表し方があるものとして、字体の判明の上で問題のならないとはなんともおおらかなものではないか漢字。

先生の、迫力あるお話、頭の中は一杯です。

前は、難しく、続けられるか不安でしたが、今回は面白く受講出来ました。

